

すべての子どもたちの確かな学力の定着をめざしてⅡ —子どもたちの学力を支える「背景」をさぐる—

西田 晋

本研究では、子どもたちの学力を支える「背景」をさぐるために、昨年度筆者が実施した生活意識調査の結果をもとに分析・考察を進めた。特に、家の人に受け入れられている、という子どもたちの意識を「受容感」として着目し、学習意欲や学習に取り組む姿勢とどのような関連があるのか、分析を進めた。さらに、学習意欲そのものを数値化してとらえることを試みるなかで、学習意欲と、「受容感」や生活体験等との間にどのような関連があるのか、モデル図の作成を通して検討を進めた。

最後に、分析結果に表れた数値の背景を推し量りつつ、筆者がこれまで学校現場で学んだ経験をふまえ、今後の取組について若干の提言を行った。

第1章 研究の概要

第1節 先行調査研究から

学習意欲に関する先行研究を概観した結果、学習意欲を高めるためのキーワードとして「自分と他者との関係性」「受容感」「雰囲気作り」「人間関係作り」等が浮かび上がってきた。

第2節 分析をすすめるにあたって

生活意識調査（平成18年度実施分）について
分析は、家庭における学習・生活の実態把握をするために行った生活意識調査の結果を活用した。質問紙の作成にあたっては、「子どもの実態」とそれを支える「家の人のかかわり」と対応した形で把握できるようにしたものである。

＜調査対象＞ 京都市立小学校第6学年児童

＜調査時期＞ 平成18年7月5日～21日

＜分析対象となる有効回答数＞1,370件

生活意識調査の結果を分析するにあたっては、次の二点を主な分析の視点とした。

一つ目は、「子どもたちが感じている『受容感』に着目し、『受容感』と家庭学習の実態や生活意識との関連をみつめること」である。二つ目は、「学習意欲と、家の人とのかかわり・家庭学習の実態・生活意識との関連をみつめること」である。

第2章 子どもたちが感じている受容感から

第1節 「受容感」得点群について

本研究では、「受容感」を「家の人に受け入れられていると子ども自身が感じている感覚」として位置づけた。分析にあたっては、「受容感」に関連する設問の回答結果をもとに得点化を行い、獲得した得点の上位よりおよそ25%ずつを階層化して「受容感得点群」を設定した。そして、得点の高い群から順に「受容感Ⅰ群」、以下「受容感Ⅱ群」「受容感Ⅲ群」「受容感Ⅳ群」と命名した。

第2節 学習とのかかわりについて

学習に向かう意識や姿勢に関する設問の回答結果と受容感得点群とのクロス集計を行い、それぞれの結果を図1、図2のようにグラフ化した。

図1は、「机にむかったら、すぐに集中して学習に取り組んでいますか」の回答結果である。

「いつもしている」と回答した群に着目すると、受容感得点の高位群ほどその割合が多いことがわかる。また、「いつも（まあ）している」と肯定的に回答した結果の割合をみると、Ⅰ群ではおよそ3人に二人の割合であるのに対し、Ⅳ群ではおよそ3人に一人の割合となっていることがわかる。

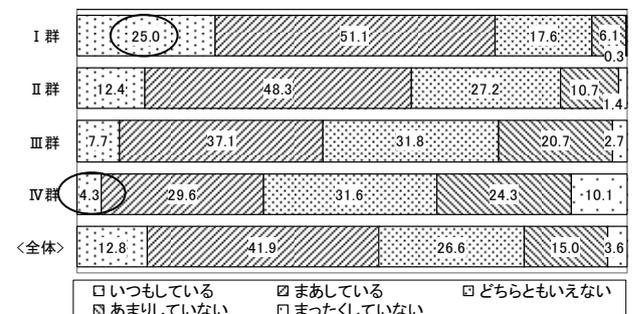


図1: 机にむかったら、すぐに集中して学習に取り組んでいますか



図2: 勉強することは、楽しいことだから

以上のように分析を進めた結果、高い意欲をもって学習に向かう子どもの姿について考える上で、「受容感」の存在が何らかの形で関連していることが示唆された。

第3節 共有体験とのかかわりについて

共有体験と「受容感」との関連について検討するためにクロス集計を行い、それぞれの結果について図3、図4のようにグラフ化した。

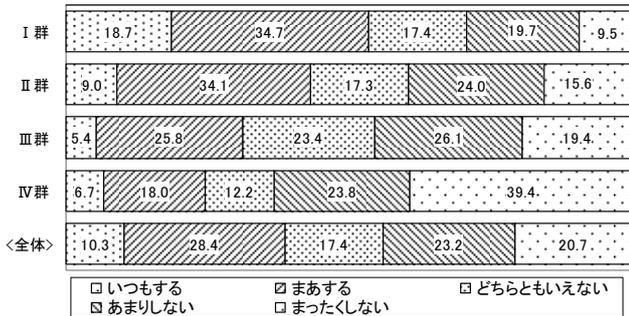


図3 いっしょに自然に親しむ体験をしますか

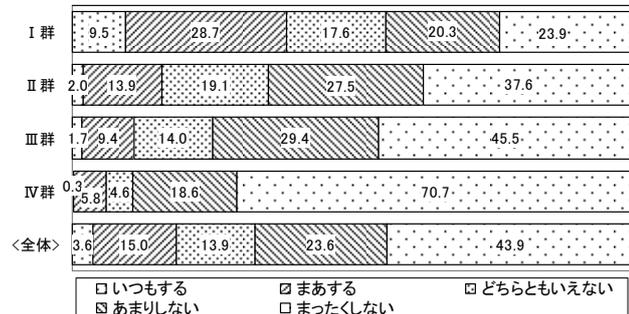


図4 本を読んだり感想を話し合ったりしますか

共有体験とのかかわりでは、特に「本に関する体験」に着目した。たとえば、読み聞かせの有無や、感想交流の有無に関しては、「いつも（まあ）する」と回答した割合が、受容感得点の高位群ほど多くなっていた。「本に関する体験」の豊かさや多さは、子どもたちの受容感を高める要素として重要な位置を占めていることが示唆された。

第3章 学習意欲を支える家の人のかかわりから

第1節 「学習意欲」について

「学習意欲」に関する探索的因子分析を進めた結果、4つの因子を導き出すことができた。それぞれの因子には、「計画して進んで取り組みたいという気持ち」「さらに学びたいという気持ち」「やりとげたいという気持ち」「自分はできるという気持ち」と命名した。

第2節 「学習意欲」に関するモデルの構築

「学習意欲」に関する構造モデルを、10項目の観測変数と4つの因子で作成した。同様に「家の人と共にした体験」に関する構造モデルを9項目の観測変数と2つの因子、「受容感」に関する構造モデルを6項目の観測変数より作成した。

そして、「学習意欲」の成立過程に関する因果モデルを複数作成し、それぞれのモデルについて共分散構造分析により検討した結果より、最も適合度の高いモデルを導き出した。

第3節 総合的考察

導き出した「学習意欲」の成立過程に関する因果モデルについて、それぞれに示された因果係数より解釈を行った。その結果、「学習意欲」を高める要素として、「家の人と共にした体験」が単独で作用しているものではないことを読み取ることができた。また、「受容感」の高まりが「学習意欲」を高める要素になっているが、その「受容感」の高まりに強く影響を与える要素として「家の人と共にした体験」が存在していることがわかった。

次に、「家の人と共にした体験」から「学習意欲」への直接効果と間接効果では、どちらが大きいのかについて検討をした。

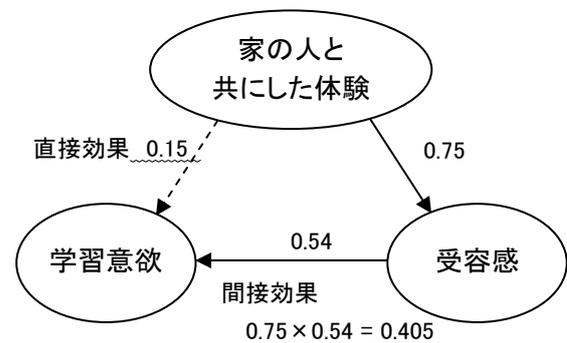


図5 「学習意欲」への直接効果と間接効果

図5に示すように、導き出された間接効果の値0.405は、直接効果の値0.15より大きいことから、「家の人と共にした体験」は、「学習意欲」を直接高める要因であるが、それ以上に「受容感」を高めることを通じて、間接的に「学習意欲」を高める要因になっているということが明らかになった。

第4章 分析を終えて

分析結果に表れた数値の背景を推し量りつつ、筆者がこれまで学校現場で学んだ経験をふまえ今後の取組について若干の提言を行った。

第1節 家庭で大切にしたいはたらきかけ

共有体験を通して、子どもの思いをしっかりと受け止めることを意識したはたらきかけをすることや、子どもの「自律」を意識した共有体験の機会をもつことが、学習意欲を高めるために効果的なはたらきかけになると期待できる。

第2節 学校で大切にしたいはたらきかけ

安心して互いの思いを話し合ったり、考えを主張したりすることができるという雰囲気を大切にしたい。友達や教師とのかかわりを意識した指導例として、『聞く』から『聴く』への系統的な指導を意識的に取り組むことが、学習意欲を高めるための基盤を作る上で大切なはたらきかけになると考える。